

保育と CONNECTEDkind

木戸啓絵

きっかけは実践報告

このコラムでは、保育者養成の立場から、大学生や保育現場の先生方と一緒に CONNECTEDkind で遊ぶ活動を通して、感じたことや考えたことをまとめてみたいと思います。私が保育者養成の現場で、CONNECTEDkind を実践してみたいと思ったきっかけは、当科研の研究チームの中で行われた、目黒区立五本木小学校の鈴木陽子先生の実践報告でした。鈴木先生の図工の授業実践報告では、CONNECTEDkind の実践を通して、子どもたち一人ひとりが見立ての楽しさを味わい、クラス全体に想像の世界の豊かさが共有される様子が伝わり、とても素敵な実践であると感銘を受けました。授業では、子どもたちに自然物とその影の写真を提示しながら、「何が見えるか?」「何が聞こえるか?」「どのようなタイトルをつけるか?」と子どもたちに問いかけます。子どもたちは、自分の作品だけでなく友達の作品にも触れながら対話を重ね、見立てによる想像の世界を仲間と共に味わいます。

大学生と CONNECTEDkind

私は、教員養成学部勤務しており、幼児教育や小学校教育の現場を目指す学生たちと学んでいます。そこで、担当しているいくつかの科目の中で実際に CONNECTEDkind の実践を学生たちと一緒に実施することにしました。

CONNECTEDkind では、各自が自然物とその影を見て、想像したものを描き、仲間と見せ合いそれぞれの印象を分かち合います。私の実践では、鈴木先生の授業実践から得たアイデアを参考にして、写真を提示する際に「何が見えるかな?」「どんな音が聞こえてくる?」という問いを添えてみました。実際には、なかなかイメージが湧かない学生がいることも予想されたので、「形や色から見立ててみよう」「ぐるぐる回して見てみよう」「目を近づけたり遠ざけたりして見てみると何が見えてくるでしょう?」「誰が?何が?隠れているでしょう?」などと声をかけながら、一人ひとりがイメージの世界を自由に広げられるよう心がけました。作品への取り組み方は、一人ひとり異なります。どんどんイメージが湧いてきてたくさん作品を作りたい人もいれば、じっくり時間をかけて取り組みたい人もいます。受講生全員がそれぞれのペースで自由に楽しめるよう、素材となる写真も1枚ではなく複数準備をしました。

まずは一人で CONNECTEDkind を楽しみ、各自の作品が出来上がったところで、それぞれにタイトルをつけてもらいました。一つの写真で作品を完成させた学生もいれば、写真を複数枚使って作品を完成させた学生もいました。その後、自分の作品を受講生同士で見せ合い、新たなタイトルをつけあったり、作品を見て感じたことなどを語り合ったりしました。同じ写真を見ても、イメージされるものは一人ひとり異なります。互いのアイデアを共有しあうことで、想像したことが同じであったと言って喜んで、違ったイメージを持ったことを面白がったり、さまざまな姿が見られました。その後、2, 3人のグループに分かれてもらい、各自で作った作品を組み合わせ、物語をつくってもらいました。空想のキャラクターが冒険をしたり、時空を超えた世界が交差したり、個性的な物語が数多く生まれました。各グループで生まれた物語は、クラス全体で共有しました。

授業終了後、学生たちからは、一人で想像することの楽しさと同時に、仲間と一緒にになって想像しお話の世界を考えることが面白かった、といった声が聞かれました。活動当初は、表現をすることに躊躇する姿もありましたが、仲間との作品作りを通して、それぞれの空想の世界がつながり、さらなる空想の世界が新たに広がることの楽しさを味わう様子が見られました。また、学生たちからは、これから保育現場に行った際には「幼児期の子どもたちと CONNECTEDkind の実践をやってみたい」「一緒に自然物の写真を撮るところから、子どもたちとやってみたい」といった声も聞かれました。

CONNECTEDkind が開く世界

普段、大学の授業などでかかわる学生たちを見ていると、あらかじめ決められた正解を求める傾向が強いと感じることが多くあります。そこで、CONNECTEDkind の実践では、他者や自己による評価の視点を超えて、たくさんのアイデアが生まれることや、仲間と一緒に創造性を発揮することを学生たちに意識してもらいました。それぞれの思いを自由に表現すること、そしてその表現を一つのきっかけとして人とつながりあうことの楽しさを感じることで、イメージの世界が広がる豊かさを体感してもらえたとともに実践を試みました。

保育者養成の学びの過程では、目の前の子どもたちを理解することや、私たちの身の回りの環境と応答的に関わっていくことが重視されます。しかし、そのようなことが重要であるといくら頭で分かっているとしても、それを身体感覚で捉えることや実際に自

分自身で行うことは、それほど簡単なことではありません。CONNECTEDkind の実践では、目の前の対象、すなわち自然物とその影とをどちらも排除することなく、ホリスティックに対象と出会います。そして、空想を膨らませることで、目の前の対象が語る言葉に耳を澄ませます。ここでの言葉は、ファンタジーの世界を通して語られます。身近な自然物を、さまざまな角度から眺めて、多様な見立てを楽しむ中で、聞こえてくる対象の声は、想像性を掻き立てます。そこには、あらかじめ決められた正解や自然科学的な説明から自由になった地平が広がっています。心の目で対象を見つめ、心の耳で対象の声を聞くことで、一人ひとりが対象と特別な関係を結んでいるとも考えられるのではないでしょうか。影を含めた自然物が、私たちに語る不思議な物語の数々に想いを馳せることは、自然科学的な理解とは異なるアプローチで、世界とのつながり方を示してくれるように思います。乳幼児期の子どもたちは、このように世界と出会っているのかもしれませんが。私たちにとって、自然物であれ、想像を共有する仲間であれ、目の前の対象を完全に理解することは、不可能に近いようにも思われます。だからこそ、目の前の他者に想像力を働かせて、目を向け耳を澄ませること、それこそが、CONNECTEDkind の実践の魅力の一つではないかと思うのです。

今回は、CONNECTEDkind や鈴木先生の授業実践から着想を得て、私なりにアレンジを加えた実践を紹介しました。CONNECTEDkind を創られたラウラ・ベレヴィカさんの思いを尊重しながらも、目の前の学生たちと共にワクワクする気持ちを大切にしながら活動の発展を模索しました。今回、いくつかの実践を実施してみて、CONNECTEDkind の持つ可能性や奥深さをあらためて感じた機会となりました。ぜひ、みなさんも、さまざまな場で、自分たちの CONNECTEDkind を楽しんでいただければと思います！



写真1 複数の学生が一枚の作品を共同で制作（タイトルなし）



写真2

学生自身のつけたタイトル「楽しいお料理タイム」

友達のつけたタイトル「今日の晩ごはん何にしよう」



写真3

学生自身のつけたタイトル「サイと小さな友達」

友達のつけたタイトル「サバンナの日常」

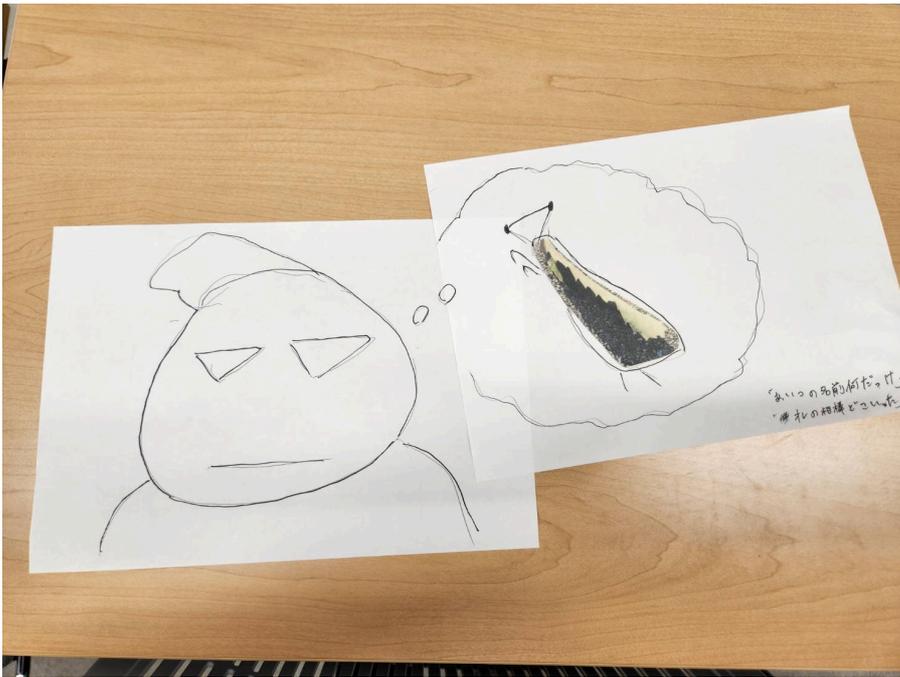


写真4

学生自身のつけたタイトル「あいつの名前なんだっけ」

友達のつけたタイトル「オレの相棒どこいった」